

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】曾小蘭

【所属】(助成決定時) 東北大学大学院国際文化研究科

【研究題目】

創造社同人と中華学芸社との関係をめぐって —— 郭沫若と張資平との比較を中心に ——

【研究の目的】(400字程度)

大正年間、在日中国人留学生によって創設された団体に、学術団体・中華学芸社(1916)と文学団体・創造社(1921)とがある。これらの団体は性格が異なるものの、両者の間に浅からぬ交流があった。特に創造社の同人であった張資平と郭沫若は、寄稿投稿を介して中華学芸社と密接な関係を築くようになっていた。

本研究では、郭沫若と張資平との比較を中心に、創造社が設立される前に、両者は中華学芸社を通じて当時の文壇でどのように文筆活動をやっていたのか、そして設立以後、両者の性格はどのように変化したのかを解明する。両者の事跡から創造社と中華学芸社の性格をあぶり出すと同時に、創造社が革命文学へと転向することに対する両者の態度の違いの原因を明らかにしたい。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、創造社同人の回想録と中華学芸社に関わる史料を調査した上で、創造社設立前に郭沫若と張資平が当時の文壇で文学活動を展開するために、中華学芸社にどのように活用したのかを明らかにした。

張資平については、中華学芸社の機関誌『学芸』に発表した記事の分析を通じて、彼が中華学芸社在籍時代に、文学創作より、専攻知識の翻訳に関心を寄せるという特徴を分析した。張資平は当初欧米列強の対中政策を分析し、専攻である地理学に関する知識を断片的に紹介するに過ぎなかった。しかし中華学芸社の動向に沿い、地理学に関する研究や学術著書の翻訳に専念するようになった。

しかし、一方の郭沫若は張資平と異なり文学創作を集中的に行っていた。その差異を明確化するために、当時マルクス主義研究で大きな影響を及ぼした河上肇に対する認識を一つの指標にし、郭沫若は河上肇の著作から何を求めようとしたのかを分析した。郭沫若は河上肇の著作『社会組織と社会革命に関する若干の考察』に政治の視点から注目し、無産階級の利益を守る政治思想として着目した。その一方、『学芸』掲載の文章を見ると、日本留学中に河上肇の理念を勉強したほかの中華学芸社のメンバーは、河上肇を経済学者とみなし、アダム・スミスと河上肇の経済学の理念に興味関心を抱いていた。そのため、彼らは中国の国家富強を目指していたが、無産階級者に対する不信任感を抱いていた。しかし郭沫若は無産階級者の利益を守るために、社会革命を提唱すべきだと提唱していた。これは郭沫若と中華学芸社メンバーとの相違点だと思われる。

【結論・考察】(400字程度)

在日中国人留学生の郭沫若と張資平は、中国の文壇で活躍する目的で中華学芸社に入会した。郭沫若は入会后、河上肇に対する認識の違いから他の中華学芸社の会員と対立、中華学芸社から脱会し、創造社に革命文学の提唱を展開した。その一方、さほど社会主義に関心を寄せなかった張資平は地理学に関する教科書の翻訳や執筆に没頭していた。これは「科学的救国」を目的とする中華学芸社の性格と一致しているが、創造社が革命文学へと転向する方針と大きく異なっていたと解明する。

このように、両団体の性格の相違、郭沫若と張資平の両者における革命文学への認識の相違が原因となったと思われるのである。